

(書評)

## 小高敏郎氏著「松永貞徳の研究 続篇」

金子治郎

小高氏が昭和二十八年の末に出された「松永貞徳の研究」は、まことに行き届いた伝記研究であった。それは貞徳の伝記であるとともに、貞徳の時代の文壇史でもあった。信憑すべき貞徳の詳伝として画期的な著作であったことは勿論だが、貞徳を中心とした当時の文化文芸の社会が活写されているという点でも教えられるところの多い労作であった。それは氏の方法が、貞徳の周辺に照明を当て、時代環境の中で貞徳の人と文芸の形成を跡付けるところにあった結果であり、その

ために資料の博搜と考証に異常な努力を傾けられた結果であらうと思う。たとえば、貞徳の周辺に登場する人物であれば、どんな端役と見える者に対しても考察の手を緩めない。時に本筋から離れた詮索のための詮索と見える場合もあるが、それは結果論であって、それほどまでに情熱的な詮索なしには、あの見事な成果は得られなかったらうと思う。氏の貞徳伝が、多くの一見煩雑な考証を縫って進められていながら、常に生々した感動の湧いてくる理由は、実は右のような

飽くなき考証にあつたろうと思う。一方この書の態度について、あまりに自己を語り過ぎてゐるといふ氏自身の反省がある。主観的な解釈や評価が多いという意味のようである。なるほどそれがこの書を明快なものとし、生々としたものにしてゐる面もあるにはあるようである。だがこの書に本質的なものは、なんといつても客観的な考証の深さにあると思う。その深さがしばしば歴史の内側にまで踏み入るところに、この書の眞の生命があると思う。すくなくとも、そういう読み方をすることによって、わたしなどは、この書から実に多くのものを教えられたのである。

あれから二年たつて、今回「松永貞徳の研究 続篇」の発刊を見た。前著が四百頁、今回の続篇が五百余頁、合計千頁に近い分量の研究になる。しかもこの続篇は、よくあるような前著の補遺・雑録といつた種類のものではなくて、初めから氏の貞徳研究の構想の中にあつたもので、そのことは、すでに前著の緒言に、「貞徳の著述類の書誌的研究、並びにその学問及び文学作品の品階評価は、伝の叙述中必要な程度には触れたが、詳細は第二部『学問と文学作品の研究』に委ねた」と予告されていた。この続篇の内容を見ると、前篇・後篇・附篇と大きく三篇に分かれ、前篇は「論説篇」となつてゐ、これがさきの「学問及び文学作品の品階評価」にあたり、後篇は「書誌的研究」で、これが「貞徳の著述類の書誌的研究」にあつてゐる。前著の伝記的研究に対して、続篇では、学

問および文学作品の研究と書誌的研究との二篇を立て、この三部によつて、氏の貞徳研究が構成されてゐるわけである。

前篇の論説篇は、貞徳の学問と文学に対する品階評価であつて、氏の貞徳研究の結論とも見られるものである。その組織を見ても、氏一流の行き届いた用意のほどがうかがわれる。まず序説として「中世文学の特質」を説き、第一章総論では、「時代の背景」と、貞徳の「文芸活動の概観」を述べてゐる。前者は、貞徳の中世的性格を明らかにするためのものであり、後者は、以下に論ずる本論の部分がジャンル別であるに對し、各ジャンルの时期的相互關係を明らかにするためのものである。次に本論の部分には、ついで、「歌学」「和歌」「狂歌」「連歌」「俳諧」「貞徳文集その他」の六項について、第二章から第七章まで、それぞれ章を設けて詳説し、最後に「結び」として「貞徳の文学史上の位置」が説かれてゐる。その結論は、貞徳の活動は、俳諧史・和歌史・歌学史、さらに狂歌史・庶民教育史と多方面にわたるもので、それだけの学問的価値は二流の程度であつたが、多くの門下を養成し、堂上のな和歌や歌学を地下一般層へ普及せしめ、俳諧・狂歌・庶民教育においても、これを地下に流布浸透せしめた功績は他に比肩するものがないといふにある。要するに「前時代の文化伝統を一身にうけとめ、庶民的な近世文化の基礎を築いた」ところに貞徳の文学史的・文化史的な位置がある」と結論するのであるが、前著の伝記的研究における具体的な

跡付けを併せ考へる時に、この結論の重さがよく諒解されるのである。

論説篇の本論の部分では、貞徳の和歌観や俳諧観が検討されているのに併せて、和歌・狂歌・連歌・俳諧の作品自体が取り上げられる。この篇の目的からいって当然のことかも知れないが、作品自体をまともに論じておられる点は、やはり興味深い。中でも俳諧については、従来のように貞徳の俳諧観とその作風とを固定したものの、変化発展のないもののように扱うだけでは不十分だとし、そこから俳諧観・作風の変化発展という点に着目していられる。すなわちその変遷を三期に分け、第一期は、寛永十年の「犬子集」あたりまでで、軽くさらりとよんで、平浅ではあるが穏雅なユーモアの漂った作風の時期、第二期は、貞門が全国俳壇の中心となった寛永末年ごろまでで、烈しい意気込みで俳諧に乗り出し、その作風の複雑かつ拮据になった時期、第三期は、正保から没するまでで、技巧が円熟して目立たなくなり、情景の浮ぶような作風の時期と三段に分けて整理する。またその俳諧観について、俳諧をもって和歌・連歌に入る階梯とする従来の俳諧階梯観を排して、貞徳には俳諧の独自の価値に対する認識があったとする。蕉風成立を準備した貞門俳風については、さらにとれほど研究されてもよいと思われる今日、こうした小高氏の実証に基づく立ち入った研究成果の提示は、まことに興味深く、教えられるものであった。

この論説篇で感じたことの一つに、序説の「中世文学の特質」に示された氏の文学史観がある。氏は中世文学の特質を主として中世の歌学について論じ、中世的学問の特質が伝統墨守の保守的性格と宗教の強い影響を受けた点にあるとし、そこから宗教的・秘传的・師伝的・保守的・因習的・教学的などと呼ばれる中世的特質が生れるとする。これは貞徳が中世歌学の継承者であること、法華宗の熱心な信者であることなどから、貞徳における中世的性格の検討のために提示されたもので、その限りでは一応首肯されてよいわけである。しかしそのために氏は、お伽草子・俳諧・小歌・狂言などの中世庶民文芸は、中世的なものの中に胎動する近世的なものであるとして、「中世文学の特質」の考察から除外されるのである。これも一つの史観であろうが、貞徳の史的位を全面的に検討されるためには、庶民文学の流れをも含めて「中世文学」とし、その特質を考えてほしかった。そうした上で、俳諧なら俳諧が、貞徳の時代に特に勃興してきた理由や、貞徳における中世俳諧の継承と発展を説いていただきたいと思う。

後篇の書誌的研究では、およそ貞徳の著作とされているもの全部にわたる懇切詳細な解説・研究が展開される。諸本の博搜に努め、比較研究の労を惜しむことなく、その結果、貞徳の諸著作の成立なり性格なりの闡明されたものが多い。たとえば俳諧の主著天水抄であるが、世に天水抄の名で呼ばれ

るものには、実は、「連歌天水抄」「俳諧天水抄」「広本天水抄」でもいうべき三種類があるとす。その中、貞徳の著したのは「俳諧天水抄」であつて、「連歌天水抄」は宗義・昌休の著、「広本天水抄」は良徳が「連歌天水抄」その他を摺摺編纂したもので、貞徳の天水抄とは区別すべきであるとする。

進んで貞徳の天水抄の成立事情を数種の冊子本と卷子本一種について比較検討した結果、卷子本は大休貞徳の所説を中心にまとめられており、冊子本の方は、それと異つた順序でまとめられ、それに弟子良徳が一部付加したものだといふ。この天水抄によつて貞徳の俳諧観を考察されるにあつて、成立事情についてのこれだけの基礎的研究を前提とされたことが、どれだけその考察の信頼度を高めるものであるかは、すでにいうまでもないところであらう。

こうした書誌的研究が「歌林樸楸」をはじめ、その他の著作についても一々丹念に行われ、それは進んで「連詠秘決抄」だの「切紙秘伝良菜抄」だのといふ、秘伝書群にまで及んでゐる。こういった貞門末流の秘伝書類は、この種秘伝書が一般にそうであるように、その内容的価値の低いにかかわらず、伝授、伝来の実際がどうかといつた点になると不明なところばかりで、その点まことにやっかいな代物で、たいがいは敬遠してしまふものであるが、こういった秘伝書類にまで考察を惜しまれなかつた氏の態度は、まことに敬服の外はないのである。

以上ごく簡単に、本書の主内容である前・後両篇を紹介したが、本書にはさらに附篇として「従来の松永貞徳の研究」と「松永貞徳の研究」補正」とを収めてゐる。前者は、これまでの貞徳研究のうち、前者に収めた伝記研究に関するもの以外の研究を掲げ、簡潔に解説してゐる。後者は、前者「松永貞徳の研究」に対する補正をまとめたもので、前者に対する批評に答えたり、その後の研究によつて訂正したり補つたりしておられる。父永種の連歌作品が大坂天満宮文庫本によつて補つてあるなどがその一例で、こういったものになれば、これからも追加される可能性はあらう。がとにかく現在の最善を尽しておられるのは、今後の研究者にとつても、まことにありがたいことといわねばならぬ。最後に人名、書名索引がある。氏の研究が貞徳をめぐつてその周辺に精密な探求の網を広げておられるだけに、この索引は、貞徳についてはもとより、貞徳の時代に関心を抱く者にとつても、きわめて有益である。

小高氏の前者「松永貞徳の研究」には深い感銘を受けたものであるが、今またその統篇を得て、氏の情熱的な仕事ぶりに、さらにいさゝかの感銘を覚えてゐる。この短い紹介は、氏の著書から受けた深い感銘を何程もいふ得てゐないやうで、まことに残念であるが、俳諧史についてはもとより、広く中世から近世への過渡期について考へるためにも、本書が必読のものであることを力説したのである。

(昭和三一・六・廿五至文堂刊)

(広島大学助教授)